



磁石についた四文銭 (真鍮)



時代劇を見ていた時「ビタ一文まけられねえ!」こんなせりふを聞いた記憶があります。「ビタ一文」???「一文ではありません」ビタって何だろう?早速調べまし



■36

『ビタ銭探し』

た。『ビタ銭』漢字では銅銭と書き、良銭と区分されていきます。室町中期以後、わが国で私鑄した偽造された銭、粗悪な銭貨や、欠けた文字の読めない銭貨や、鉄製のものをビタ銭と言いました。その価値は一文銭の数分の一、ほんのわずかなお金のことです。

鉄で出来た『寛永通寶』は別名『銅銭』とも呼ばれましたが、サビが出る。財布が破れるなど苦情が多く評判の悪い一文銭で

た。『ビタ銭』漢字では銅銭と書き、良銭と区分されていきます。室町中期以後、わが国で私鑄した偽造された銭、粗悪な銭貨や、欠けた文字の読めない銭貨や、鉄製のものをビタ銭と言いました。その価値は一文銭の数分の一、ほんのわずかなお金のことです。



後日入手したビタ銭『寛永通寶』一文銭(鉄製)

衣川製鎖工業・衣川良介社長

画像はカラーと交換しています。



『寛永通寶』一文銭(鉄製)

した。最初に発行された時は銅銭と同じ価値でしたが、だんだんと交換比率が悪くなり、ビタ銭十文と良銭一文が同等とされた時代もあったようです。鉄製の寛永通寶の一文銭が初めて発行されたのは、元文四年(1739年)です。幕府が鉄銭鑄造に踏みきったのは、銅、真鍮(しんちゅう)の地金類が高騰し、貨幣の鑄造に支障をきたしたからです。

鉄で出来たお金は磁石でつく、強いネオジウム磁石を持ってビタ銭を探しに行きました。幸い姫路城の前、大手前広場では毎月2回、日曜日に青空市場が

開かれます。取れたのは野菜や衣服、小間物など思い思いの品を並べ立てた店が100軒ほどあり賑わっています。その中に骨董品の店がありました。30ほどの薄汚れたザルに古銭がほりこまれ、四角に切られた厚紙には「1ヶ百円」と書かれています。用意していった磁石でザルの中を

ゴソゴソ、パチンと最初に磁石にひっついたのは白色の『昭和八年の五銭玉』でした。目的の古銭は江戸時代に作られた寛永通寶です。青黒い古銭を集めて、その上に磁石を走らせます。少し赤錆の出た一つを見つけた磁石を近づけるとひっつきました。ビタ銭かな?そう思いましたが、鉄製ではなく真鍮の色をしていました。鉄が不純物として含まれたものでしょう。二枚重なり錆びて離れない銭をみつけ、これも頂ぎ。地面に膝をつきザルを方サゴソ、骨董屋の親父さん気を使ってダンボールを渡してくれました。磁石につく硬貨を選別、どう見ても黄銅(真鍮)でも磁石につくものを発見。「え?何?この四文銭」もちろん買いました。探した古銭は14ヶ、千円でええわ、磁石にひっつか金を探したんか?」は

しかし、ふしぎです。銅製(青銅や黄銅)に見える、手触りも重さも良銭と変わらない寛永通寶が磁石につくなんて。江戸時代を代表する庶民のお金寛永通寶に強い興味を持ち調べ始めることになってしまいました。寛永通寶は寛永13年(1636年)から幕末まで鑄造された銭貨で江戸坂本をはじめ色々の地域で作られています。この磁石につくのは何なのでしょう。

【参考図書】
▽鉄から読む日本の歴史(窪田蔵尾郎 1966年、インターネットhttp://homepage3.nifty.com/sirakawa/Coin/J030.htm)